

宮沢賢治「西域」作品と島地大等の印度仏蹟探検―作品「マグノリアの木」を視座に

秋枝(青木)美保(人間文化学科)・鄭亜楠(人間文化学科)

宮沢賢治の西域を舞台とする作品の成立背景として、明治末期に西域の仏教遺蹟を踏査し多く将来品をもたらした大谷探検隊の活動に注目する。特に、賢治が影響を受けたことが指摘されている盛岡市願教寺住職、島地大等の、第一次大谷探検隊のインド隊の一員としての活動を明らかにし、作品「マグノリアの木」との関連性を論ずる。

【キーワード】 宮沢賢治 西域 第一次大谷探検隊

はじめに

宮沢賢治の作品においては、西域を舞台とするものや西域に関連する語彙が登場するものが一つの領域を形成している。それは、「手紙一」・「手紙二」など初期のものから、第二集など中期の作品にいたるまで、長い期間にわたっている。賢治の西域への関心の原点にあったものは何だったのだろうか。このことは長らく筆者の不審に思うことの一つであった。当時出版された西域にまつわる書物から得た知識はあったにせよ、なぜそこまでの情熱が注ぎ込まれたのか、もう一つ納得できないものがあった。

二〇一四年度の卒業論文研究において、ゼミの学生で、甘肅省、酒泉出身の留学生・鄭亜楠が、童話「雁の童子」論を取り上げたことを機に、筆者も賢治の西域作品の背景を追究することとなり、

二〇一五年度研究生となった鄭とともに、龍谷大学大宮図書館で、大谷探検隊の活動資料を調査した。その中で明らかになったのは、賢治が法華経信仰に移る機縁となったとされる『漢和対照妙法蓮華経』の編著者・島地大等と、その周辺の若き僧侶たちの活動であった。

本論では、前半の島地大等に関連する事跡について秋枝が担当し、後半の作品「マグノリアの木」についての作品論を、鄭が担当する。本作品は、西域作品の中でも、山岳を歩きまわる僧侶の物語であり、大谷探検隊の活動の現場を彷彿とさせるものがある。今回の調査から、筆者らは、賢治が長い期間にわたって西域をイメージした作品を書き続けた背景として、一つの推測を強く抱いた。つまり、大谷光瑞の命によって西域実地踏査に出かけた僧

侶達の体験を、実際に探検に参加した島地大等から直接聞いたといった実地体験があつたのではないかという推測である。それほど、島地大等とその周辺の僧侶達の体験は、今回の資料調査から鮮烈に浮かび上がるものであつた。以下、その内容を紹介するとともに、賢治の西域作品成立との関係を考察したい。

第一部 宮沢賢治の西域作品と島地大等ら大谷探検隊の活動

1、宮沢賢治の西域作品についてのこれまでの理解―島地大等についての言及

宮沢賢治の西域作品研究について先鞭を付けたのは金子民雄であるが、その著書『宮沢賢治と西域幻想』（注1）で、賢治の西域作品執筆の背景に大谷探検隊の成果があつたことを指摘しているものの、当時出版された橘瑞超の『中亜探検』をその最有力な情報源としているのみで、大谷探検隊の実地踏査の内容にまでは踏み込んでいない。ましてや島地大等については言及がない。

最近の言及として、『宮沢賢治イーハトーヴ学事典』（注2）における「西域」のトピックを担当した池澤夏樹が次のように述べて、西域関連の情報源として島地大等を挙げているのが注目される。

詩人が西域に惹かれたきっかけは一九〇二年以来二度に亘つた大谷探検隊の偉業だったらしい。実際、彼は十五歳のときから何度か第一次大谷探検隊に参加した島地大等の仏教に

関する講習を聞いている。その時の論題は「大乘起信論」だが、余談の中には西域の話も出ただろう。

池澤は、さらに「雁の童子」の話の元になったミールン発掘の有翼天使像について、スタインが発掘する前に第二次大谷探検隊の橘瑞超がこの遺跡を発見していたことに言及している（金子民雄が前掲書 p 68、p 80 でこれについて言及している）。さらに、池澤は、賢治の西域幻想が「どれも画像的で、何か図録のようなものを見たのではないかと思う」と述べ、その原資料として『西域考古図譜』（一九一五年）を見る機会はなかっただろうかと述べている。本論の推測に重なるものがあり、興味深い。

ただ、同書全体における「島地大等」についての言及（人名索引には十九カ所あり）には、その信仰者の立場としての特徴や活動について深く言及したものはなく、ましてや大谷探検隊に参加した際の大等の活動について触れたものはない。

ただし、島地大等と賢治の関係についての情報は、『新校本宮沢賢治全集 十六巻 補遺資料 年譜編』の、一九一一（明治四十四）年、盛岡中学三年生、十五歳の八月の項に、記載があり、島地の講話を聞いたと推定されている。脚注に、島地大等著『思想と信仰』（昭和三年十一月四日 明治書院）の年譜から引用された「夏期仏教講習会」に関するものと、それにまつわる岩手日報の記事の紹介がある。また、同年譜の十七歳、十八歳、十九歳に、島地との関連を示す記載がある。周知のように、賢治十八歳のときに、大等編著『漢和对照妙法蓮華経』を読み、法華経信仰に入ったとされている。

なお、島地大等の研究としては、田村公子著「宮沢賢治研究のための覚え書き…島地大等の『漢和対照妙法蓮華経』(注3)・『島地大等が宮沢賢治に与えた影響』(注4)がある。これは、島地大等の書いたものから、賢治の法華経信仰を開いた『漢和対照妙法蓮華経』及び、大等の信仰の立場の特徴について論及したものであり、貴重な研究に先鞭を付けたものである。田村は、後者の論において、賢治との実人生上の関係をも丁寧に追ひながら、賢治が大等の講話及び著書を通じて、日蓮への関心を呼び起こされたことを論証している。ただし、そこには、大等自身による年譜(島地大等著『思想と信仰』所収)、大等の弟子、白井成允著『島地大等上行実』(注5)が紹介されているものの、大谷探検隊における大等の活動についての言及はない。

以上の通り、宮沢賢治の西域作品執筆の背景についての言及はこれまでヘーデン、スタインなど西洋の考古学的調査が主たるもので、大谷探検隊との関係については示唆されてはいるが、深くは追求されていない。また、宮沢賢治が法華経信仰に入るきっかけとなった『漢和対照妙法蓮華経』の著者・島地大等については、これも言及は少なく、大谷探検隊での活動については触れたものがないことがわかる。

2、島地大等 及び周辺の僧侶の探検―第一次大谷探検隊の活動

大谷探検隊の調査の実態についての調査・研究には下記の様な資料がある。

白須浄真 「忘れられた明治の探検家 渡辺哲信」 中央公論社 一九九二年十二月

白須浄真 「大谷探検隊―シルクロードに挑んだ日本人―第一次大谷隊員・堀賢雄の撮影資料」 『月刊 しにか』 十三巻

十号 大修館書店 二〇〇二年九月

白須浄真 『大谷探検隊とその時代』 勉誠出版 二〇〇二年

十月

白須浄真 「第一次大谷探検隊に係わる善教寺(安芸高田師)・

神根善雄資料について」『広島県立博物館 研究紀要 第十一

号』 二〇〇七年

白須浄真編著 『大谷光瑞と国際政治社会―チベット、探検隊

辛亥革命』 勉誠出版 二〇一一年

白須浄真 『大谷探検隊研究の新たな地平 アジア広域調査活

動と外務省外交記録』 勉誠出版 二〇一二年八月

白須浄真 『大谷光瑞とスヴェン・ヘーデン―内陸アジアと国

際政治社会』 勉誠出版 二〇一四年九月

片山章雄「大谷探検隊の活動と大谷尊重(光明)・渡辺哲信」 『東

海大学文学部紀要』 七十七号 二〇〇二年

片山章雄「大谷探検隊将来断片資料の追跡をめぐる」 『東海大

学文学部紀要』 二十六号 二〇〇九年十二月

片山章雄「2004年度龍谷大学史学大会講演 大谷探検隊の追

跡―交流人物・探検記録・関係文物」 『龍谷史壇』 一二四

号 二〇〇六年一月

片山章雄「大谷光瑞の業績…探検隊収集将来品をめぐる」(二

楽荘と大谷探検隊…シルクロード研究の原点と隊員たちの
思い」 『聚美』 十三号 香月社 二〇一四年

筆者らは、これらの資料から、龍谷大学図書館において、島地大等及び、大谷探検隊に関連する資料を調査した。その調査から、島地大等著作の論文十五編及び第一次大谷探検隊の活動記録を得た。本論においては、その中から、第一次大谷探検隊に関連する記録から得られた島地大等、及び周辺の僧侶の活動について述べる。

島地大等についての公式記録としては盛岡市ホームページに記載がある。それによれば、次のようである。

島地大等(旧姓：姫宮、幼名：等は一八七五年(明治八年)十月三日、新潟県頸城(くびき)郡三郷(さんこう)村(現：新潟県上越市)西松之木の勝念寺の住職姫宮大圓、操子の次男として生まれた。四年間の上京をへて、一八九三年(明治二十六年)に京都にある西本願寺の文学寮(現：龍谷大学)に入学した。

これに続く文面で、学僧として高く評価された大等が、明治仏教を牽引した島地黙雷に見込まれて法嗣となり、島地姓となったこと、その直後にインド仏跡調査に赴いたことなどの簡略な記載がある。

大等に触れる前に、当時願教寺の住職であった島地黙雷について触れておく。幕末に黙雷は山口県佐波郡の自寺にあったが、鳥羽伏見の戦いの際には、京都へ結集して西本願寺の改革に乗り出した一団の僧侶達の中にあつた。また、明治維新に際しては、木

戸孝允に岩倉使節団への同行を求められた法主大谷光尊の命により欧州視察に同行し、帰国後は、神道国教化を主張する政府に対抗して、欧州での新知見を元に政教分離を主張し、信仰の自由を法律上に明記させることに力があつた(注6)。言わば、黙雷は明治維新において、仏教の政治社会的な位置づけを開く働きの中核にあつた人物だと言える。大等は、その黙雷に見込まれたことになる。

さて、第一次大谷探検隊のメンバーは、いずれも京都本願寺文学寮の同窓生であり、先輩後輩の親しい間柄である。金子民雄は、京都の本派本願寺とヘーデンとの交流が始まったのは、一八九八年から一九九〇年頃のことではないかとし、それがヘーデンの第一回の探検直後のことだとしている(注7)。そのころ大谷光瑞はロンドン留学中であり、西洋の学者における中央アジアでの仏蹟発掘のニュースが彼を刺激したと推測している。そのとき、彼の周りには、彼のとりまきの多くの若い僧侶達が留学中であつた。ロシアにも二名が留学していた。光瑞は、「皇立倫敦地理学協会の会員であり、東京地学協会にも、一八九九年に入会している(鳥居龍藏と同時期の入会)。光瑞がその探検こそ自分達の「テリトリー」と感じ、日本への帰路「西域を通過して行く」という計画が持ち上がったらしい」と、金子は推定している。これが第一次大谷探検隊の活動であり、そこにはインド隊と新疆隊との二つのルートがあつた。金子・白須らの調査によって、ヘーデンと光瑞とが困難な調査において互いに協力しあつていたことが証明されている。特に、第一次大谷探検隊の新疆隊の調査ルートにおいて世界

で初めて庫車に到達したことについては、ヘデインの教示が電報によって調査隊に伝えられたことが成功の要因であることが示された。光瑞は、一九〇八（明治四十二）年ヘデインを日本に招聘し、ヘデインは同年十一月から十二月にかけて日本に滞在、官民あげての歓迎を受けた。

島地は、この第一次大谷探検隊のインド隊に参加したのである。島地のインド仏蹟調査については、片山・白須の論文における第一次大谷探検隊の行程から部分的に知ることができる。特に片山章雄「大谷探検隊の活動と大谷尊重（光明）・渡辺哲信」（注8）は、種々の資料に記載された一行のメンバーそれぞれの日程の記載を追いながら、第一次探検隊の出発日と帰着日を正確に示そうとした論文であり、その中での大等についての言及から、第一次大谷探検隊の中での大等の動きを知ることができる。

その資料によれば、第一次大谷探検隊の調査とは、一九〇二年（明治三十五年）ロンドンに留学中の光瑞一行と、同年すでにインドに単身留学していた清水黙爾（島地黙雷の妻子）、日本から応援を命じられた島地大等らが、インドおよび中央アジアで合流して、アフガニスタン・インド・ネパール（インド隊）と天山南路（新疆隊）の二手に分かれて調査したものの総体を指している。したがって、隊員それぞれの動きは極めて複雑である。光瑞一行がロンドンを発つたのは一九〇二年八月十六日で、ヨーロッパ滞在中の数名がそれぞれ、ベルリン、ロシア、マルセイユ経由でインド、中央アジアに到着するのが同年十月上旬という。日本出発の応援隊は、上原芳太郎を中心に、島地大等・秋山祐顕・升巴陸

龍が、同年十月十九日に神戸を出立、十一月十日にコロンボに到着したという。すでに単身インドに留学していた清水黙爾は、主としてカルカッタに滞在していたが同年十一月二十八日に同地を出立、三十日に北行する上原・升巴と合流した。

これらの動きを総括して、片山は次のようにまとめている。

中央アジアを経て南下した大谷光瑞と井上弘圓・本多恵隆、（ヨーロッパから）海路来た日野尊玉・藤井宣正、蘭田（宗恵）、さらに日本からの上原・島地・秋山・升巴、留学生清水の11名が連携・合流して各地の仏蹟調査に携わったことになる。（括弧内は引用者）

島地は、この調査の中で、インド分隊の一員として、インド、およびネパール国境にある仏蹟調査に携わったのである。

この調査の過程で、隊は、光瑞の父・光尊の遷化の報に接したのを始めとして、二人の隊員の訃報に相次いで接することになった。一九〇三年一月十八日にカルカッタで、光瑞は、父・光尊の遷化の報に接し、二月二日に出港、三月十二日に長崎到着。その後、一九〇三年五月五日にコロンボから乗船してヨーロッパに戻るようになっていた藤井宣正が、病状の悪化でマルセイユに上陸入院したが、六月六日に客死。六月十四日にパリで火葬し、遺骨が八月二十日に神戸に到着した。藤井の寺は長野県飯山で、島崎藤村の小説「破戒」のモデルになったことで知られている。藤村は一九〇四年一月に当寺を訪問、藤井の遺した書簡を見て、「椰子の葉陰」（『明星』一九〇四年三月号）を執筆した。藤井について、留学生・清水黙爾が、一九〇三年八月二十日に発病してボンベイ

で死亡した。炎熱の国での調査が尋常でなかったことをうかがわせる。

島地大等は、亡くなった二人とは深い関わりがあり、いずれも追悼文集の編集に携わっている。藤井宣正の追悼文集『愛楳全集』（森江書店 一九〇六年）は、島地大等の編集である。清水黙爾の追悼文集『紫風全集』（鶏声堂 一九〇七年）は黙爾の兄・雷夢の編集であるが、大等にとって中学時代からの学友であり、大等が島地家に養子に入る事によって義兄弟となった黙爾について、大等は、この『紫風全集』に、二人の交際やインドでの調査について詳細かつ哀切なる追悼文を寄せている（『嗚呼清水黙爾』p.494、p.507）。そこから、島地および周辺の僧侶たちのインドでの調査の様子を知ることができた。

片山の前掲論文によれば、調査隊員の最初の帰国は、一九〇二年十二月下旬から一九〇三年三月中旬まで清水黙爾とネパールに入った井上弘圓で、四月六日にカルカッタを島地と一緒に出発して二十四日に香港に到着、島地と分かれて五月五日に神戸に到着。その後、島地は七月十八日に上海に到着、二十九日に神戸に到着した。

以上のように、島地大等がインドでの仏蹟調査に携わった期間は一九〇二年十月から一九〇三年七月までおよそ十ヶ月間のことであった。大等は、その帰国途中で藤井の死を知り、その遺骨を神戸で迎えると同時に、義兄黙爾の死の知らせを受けたことになる。

3、島地大等 および周辺の僧侶のインド仏蹟調査の実態

—『紫風全集』から見る僧侶の仏蹟研究の姿勢—

『紫風全集』における大等の追悼文によれば、大等が黙爾を意識したのは、神田錦城中学の、黙爾五年、大等三年のときで、黙爾は同年の仲間から「将来畏るべし」と噂されていたという。だが、大等はその中学を二年で終えたと京都本願寺文学寮に入学、その一年後、明治二十七年春、黙爾が同校に入学して同級となつて初めてお互い知ることとなり、それから卒業まで満三年間友情を温めたという。黙爾は入学の頃、父黙雷の生家である山口県の上奥の寺を嗣ぐこととなり、清水姓となった。

文学寮在学中には仲間と文学会を組織して機関誌を出し、種々の文章を発表したが、それが後の『反省雑誌』（雑誌『中央公論』の前身 注9）の素材となったという。雑誌『中央公論』は、賢治の愛読書とされている。『新校本宮沢賢治全集 十六卷』年譜のp.72 明治四十四年十五歳の項に、学友藤原文三からの聞き書きとして記載がある。黙爾の書いたものの中には「梵文法華経序品名詞対訳表」といった「専門的大論文」もあり、後に文学寮の学報に掲載されたとのこと、彼らの学問的関心が原典研究にあったことを伺い知ることができる。

黙爾は、後に梵学を志して単身インドに留学したのだが、その勉強への希望は文学寮入学と同時に始まっていた。インドから初めて帰国した徳澤知恵蔵が文学寮で英語教授になったとき、「予て梵学の必要を論じつつあつた吾々は、此機逸すべからずとして寮長に請うて、新にサンスクリットの講義と印度哲学の講義とを聞

くことにした」という。ただ、徳澤は直ぐ辞職したため、続いて印度から帰国し、文学寮教授となった川上貞信についてサンスクリット研究を続けたが、「死語」の研究は「余程篤志のものでなければ続けられるものではな」く、欠席者が次第に多くなつてついにやめることになつた。その後は、大等と黙爾二人で、隔日に川上の自宅に通つて研究を続けたが、これも川上の都合で止めることになり、ついで梵学に熱心だつた榊亮三郎が文学寮教授になつたとき、二人が発起して課外にサンスクリット教授をしてもらつて研究を続けたという。

明治三十年三月に、二人は文学寮を卒業、黙爾が主席、大等が次席であつたという。大等は本願寺大学林に進学、黙爾は東京に帰り、高楠順次郎博士の門下「梵語専攻の人となつた」とのこと、四年間指導を受けた。大等は、その間、梵語研究を川上貞信に「無理に頼むで、般若心経、尊勝陀羅尼、阿弥陀経、大無量寿経等の梵文を研究した。また「金剛般若経、妙法蓮華経等の梵本や、マキシミラー、バランチン、諸氏の梵語文典を謄写して、一生懸命にモニヤムウィリアムス氏の梵英字典と頸ツピキで独習して居た」とのこと、二人の梵語文典研究への尋常ならぬ情熱が感じられる。

黙爾は、大等宛ての書簡（明治三十一年八月）で、高楠博士の下、梵文学教科書の執筆・出版に取り組んでおり、九月には帝国大学で教科書として採用される筈だと校正を急がせている旨を述べ、語学独習には自学自習が肝心と、義弟に勉学のこつを伝授している。

大等は、明治三十四年（一九〇二）五月六日、島地家の養子に入り、黙爾の法嗣となつたが、それから黙爾がインドで客死するまで約三年の間、相会したことは多かつたが、島地家内では一分たりとも一緒になることがなかつたと、述べている。その頃、黙爾は、「年来の宿志たる尼波羅梵典の搜索の爲め」インド留学の希望を持つていたが、その実現のため、父黙爾は、「熱心に本山当局に向つて印度留学の辞令を送る様にと心配せられた事は非常なものであつた」という。当時、大学林高等科在学中であつた大等も本山の有力者に謀つたが上手くいかなかつたところ、明治三十五年（一九〇二）年二月に漸く「名計りの印度留学を命ずると云ふ辞令が本願寺当局から送つて来た」。黙爾は、同年三月十五日には横浜を出港し、神戸を経由してインドに渡つたのである。

その後、大等は、大学林を卒業後、高輪仏教学院で教鞭をとつていたが、前述の如く、同年十月には、「宗主の印度聖蹟探検と云ふ盛筈に加はるべく」職を辞し、黙爾の後を追つて、印度へ渡航する。

4、インドでの調査の行程

インドでは、それぞれの調査地域が異なつていたので、なかなか会うことができなかつたが、二回ほど遭遇することがあつた。大等は、その際のことについて述べている。

一回めは、明治三十五（一九〇二）年十二月の初め、仏陀伽耶（ブツダガヤ）釈迦、成道「悟り」の地の調査に従事していた時のこと、黙爾が伽耶（ガヤ）悟りに至るまでの地）のダックバンガロ

ーにやつてきて、久しぶりに会った。しかし、黙爾は、「宗主の台命」により、「逗留わづかに数時間」で、北方ゴンダ地方へ去ったという。

翌三十六(一九〇三)年一月、王舎城(マガダ国の首都 ラージギール 釈迦布教の地の探検が済んだ大等は、単身北方のベツチアに進むことになったが、その途上、黙爾が探検終了後にベナレスの梵語大学に進む予定だと聞いていたので、帰国後父母への報告上の都合と、一方ベナレスの聖蹟鹿野苑 初天法輪の地に詣りたい希望もあったので、途中バンキプールから乗り換えてベナレスに行き、梵語大学に寄って話を聞いた後、バンキプールに引き返した。

同じ頃、黙爾と井上弘圓は、舍衛(コーサラ国)の首都 サラバステイ・マヘット 常住の地 祇園精舎があつたと迦毘羅衛(カピバラストウ 釈迦が出家まで育った地)との故址を踏査する任務大等は単身、拘尸那揭羅(クシナガラ 釈迦涅槃の地)の故址発見という任務にあり、互いに三百哩も隔っていた。この両方面の探検は、「何れもヒマラヤ山南に拡がつて居る漠々無尽のタライニ波羅引用者注 ネパール)の深林中を踏査すべき任務であつて、氣候、猛獸、毒蛇其他くさくさの故障のある処」とあり、危険な調査であつた。ネパール、タライ地方には、釈迦生誕の地、ルンビニがある。

これらの地は、いずれもインド北部のネパール国境近く、およびネパールにある釈迦の聖地である。調査に当たつてネパールの国王からパスポートを得るといふ難事があつたが、これは「地理

の便利上」大等の責任になっており、これを得るのに約一ヶ月を費やしたという。その後、井上・黙爾に再会するため、ゴラクプールに行き、駅舎で待つてっていると、翌日つまり三十六年三月四日午後四時半、黙爾が井上・本多と共に帰つてきた。これが第二回目遭遇である。再会を喜び合ったのもつかの間、翌三月五日、午後の汽車で、大等と本多はカルカッタへ、黙爾と井上は舍衛国の故址探索のため、それぞれ出立した。これがインドでの最後の別れとなつていたため、黙爾は別れるとき「流石に兄も催す涙に目をしばたきつつ告別の握手をした」といふ。これが今生の別れとなつた。

5、釈迦聖地探検の実態

釈迦の聖地はいずれも僻地にあり、踏査に困難を極めたと思われる。その状況の一端を、『紫風全集』所載の黙爾の手記「印度雑感」から見ておきたい。

黙爾は、一九〇二年の年末には、ヨーロッパから陸路をやつてきた光瑞一行と合流して、アフガニスタン・パキスタン・インド国境を探索したようである。その様子は、「印度雑感」の「其十三」、「其十四」に見ることができるといふ。

一九〇二年十二月二十一日夜の手記―「印度雑感」(ウ)其十三
★光瑞の一行に分かれた蘭田と黙爾は、二夜をベシヤワラに明かしてトンガという馬車で半日、アフガニスタン領域を越える事六哩、アフガン国境のコーハットに到着。 p 391 ~ p 394

サライから即ちタキシラの古跡調査を終へて、ピンド、ダ
ダン、カン、キウラ等の地方を経、更にサルト、レーンヂ(鹽
山)の險阻を越え候。

行きしときは駱駝に乗り候、あんまり気持のよき物にては
これなく候、帰りは驛馬「アブミ」これなく大難洪を極め候、
而も其日の行路二十二哩、而も夜に入りて月なく、星の光を
便りに、サルト、レーンヂを越えし苦しさ、足は痛む、寒さ
は身にしむ、何処まで行つても山又山、馬も疲れて早く進ま
ず、この折の難義、知る人ぞ知ると申すより外なく候。

人馬共に疲れて、泣かんに泣かれず、とほとほと峠を下る
折しも遙かにキウラの町の火光一点を認めしときの嬉しさ、
ア、この折の愉快、こもまた、都人にはよも知ること出来ま
じと存じ候。馬に跨がりしは午前八時、馬を下りしは午後十
時、暫時の間は腰が抜けた様にて、足に感覚これなく候ひし、
ア、げに疲れ候ぞかし。(傍線引用者)

一九〇二年十二月 「印度雜感」(カ) 其十四 p.395

其後 新猊下の御場所を本宮として、藪田氏と共に、諸処
を流浪なし、随分と困難な目に逢ひし代りに、生涯とても行
くこと叶はざる処に、参るを得しは、望外の幸と悦び居候。

カシミアの洞穴を、探検のときは、嶮岩絶壁を上ること
約五哩、一步を誤れば忽ち身は千仞の谷に陥りて粉微塵とな
らねばならぬ怖ろしさ、道は殆どなく、岩より岩へと攀り申
候、しかも靴にて。

この日乗馬殆ど一日、行程約二十哩、翌日も疲労御推察下
されたく候。

「タキシラ」は、パキスタンのパンジヤブ州にある、紀元前六世
紀までさかのぼる、ガンダーラ時代に始まる古跡で、ヴェーダン
タ学派、インド仏教の中心地とされる。一九八〇年に世界遺産に
登録されている。「カシミアの洞穴」とは、ヒマラヤ山脈の麓にあ
る、アマナス洞窟寺院を指すかと思われる。標高二七〇〇メー
トルの高地にあり、現代の探索においても危険な場所とされてい
る。これらの叙述から古跡探索が、山岳地帯を歩き回る困難な踏
査であったことを知ることができる。

一九〇三年に入ると、探索はネパール・インドの国境近くの、
釈迦誕生之地、終焉之地など釈迦の聖地探索に移る。

一九〇二年十二月三十一日 「印度雜感」(ヨ)其十五 p.397

★十二月二十四日に大等に会つて三十分ほど話した後、默爾は
再び午後十一時三十二分出立、バーライチ駅に到着。

ニポール、ガンジュと申す処には、今まで、一度も人の往
つたことのない、森々たる大藪ジャングルがあるので、今
度僕等の其処に行く目的は、新門様の御命令で、舍衛国、祇
園精舎等の古跡、又は、阿育大王の建てられた、石柱でも発
見しやうといふので、多分其大藪を切り開かねばなるまいか
と思ひます。其大藪の中には虎も居るし、蛇も居睡をして居
やうし、随分危険な処ださうでございます、固より其処には、
一ヶ月餘も居る予定故、天幕の中で、奇天烈な生活をするよ

り外はないのです。

一九〇三年三月二十二日 「印度雜感」(下)其二十一 413

ニポール、ガンジュの木挽工場の支配人エネバー氏(英人といふ人の親切で、天幕やら巡查やら象を貸して下すつたので、私共は一定の処に天幕を張り毎日象に乗っては林の中に分け入つたり、川を渡つたりして、いろいろ手を尽くして捜索したのですが、舎衛国の旧跡らしいものは発見することが出来なかつたのは実に何とも何とも、残念の至りにたへないのです。(中略)

夫にしても、一千年以上、何処にもあるやら分らないものを、探すのですから、大に困難な事業です。

『紫風全集』冒頭のグラビアには、この時撮影されたと思われる写真が一枚掲載されている。ジャングルの中に立つ壊れた石柱を写したもので、その裏書には次のようにある。

明治三十六年三月二日、清水故黙爾、宗主の台命を奉じ、本多惠隆井上弘圓二君と共に、印度尼波羅国タライ深林に入り、大釈迦牟尼仏降誕の故址、ルミンディーに詣し、並に達磨阿育大帝の建設したる記念石柱を検す、本多惠隆君之を撮影す、此図即是なり、図中最右側に立てるものは清水故黙爾なり

これらの探検の際に撮影された写真等資料の公表は、後述するように、光瑞の命によって大々的に計画されることになった。しかも、その編集に大等は尽力している。

大等自身の、探検の際の苦勞を語つた公的な文章は見当たらない。弟子の白井成允が著した島地の伝記『島地大等上行実』(注10)において、白井は、師の「御旅行の詳細と御探検の成績とは今よく知られない」としながら、島地の語つたことを、次のように紹介している。

和上は屢ばアジャンタ窟の雄大なる結構を語つた、而も之を語るごとに少くとも二三世紀を閲して始めて能く成されたであらう此の大工芸の何処にも一人の作者の名も刻まれてないことを注意して仏法の無我の精神を讚嘆せられた。また和上は時として鱒魚の群の辺を土人の丸木舟に身を托してガンダック河を渡つたときの恐ろしさを語つた、象の背に乗つて二三の土人に案内させてタライニポールの深き林に分け入つたとき、或は夜半野猪の群が嵐の如く狂奔して天幕の側を過ぎたときのもの凄さを語つた、最後にいよいよクシナーなる仏陀入滅の聖跡を見出さうと決心して人も無き深き林を分けて十幾日を進んだときのこゝろさびしさを語つた、その淋しさの最中に行李の底から新聞紙の小さい断片を見出して久しぶりで母国語にあひ得たときの嬉しさ―あまりにあまりに嬉しくてくりかへしくりかへし其を読み遂には暗記してしまつても其を離すことができずとうとう其を呑み込んでしまつた程にこゝろさびしくはかなかつたとき、然しまさに其のとき忽然として胸の奥に「仏われと共に在り矣」といふ声を聞いて即ちたゞちにこよなき安住を得、それからはもう今までのさびしさから離れて静かに事に従ひ得た、そして動もすれ

ば生命の危険に陥らうとするやうな極めて困難なる一切の事情にうち克ちて遂に仏入涅槃の聖跡を探るべき旅を全うすることができたとも語った、

大等の探検の一端を知ることができる貴重な資料である。これらを見れば、大等が、困難な聖蹟探検の様子を普段周囲に語っていた様子を想像することができよう。そして、黙爾・大等の探検談からは、若き僧侶達が困難な聖地探検の過程で得たそれぞれの仏の心象を読み取ることができる。

6、印度仏蹟調査への情熱のありか

印度仏蹟踏査はある意味無謀ともいえる困難な事業であったが、黙爾の手記を見ると、全体に高揚した気分が満ち溢れて悲慘さは薄い。特に、メンバー一行は、同門の同窓生であり、親戚同士の者も多く、信仰の原点を極めるという共通の目的を持った極めて強い絆でつながれた同胞の集まりであり、困難な旅程にも強い達成感を感じていたことが推測される。

その踏査を支えていたのは、原典主義、現地主義とも言える信仰追究の情熱だと考えられる。玄奘、法頭の跡を辿り、仏教誕生の原点を歩きたいという聖地巡礼の情熱である。言わば、それは修行の一形態といえるであろう。

黙爾が、文学寮時代からサンسكريット語の勉学を志していたことは前述の通りである(三を参照)。その情熱は、印度渡航後も変わることなく、一貫していた。大等は、追悼文を、黙爾の勉学

の志望を述べた書簡の引用で締めくくっている。その中で、黙爾は「梵語、印度語、波斯語、アラブ、アフガン書」を研究し尽くせば「遺憾なきに近からん」が、そこまでは手が回りかねるので、自分が重きを置くのは梵語であり、これに力を注ぎたいとし、そのために梵語大学の「文典科」に入学し、梵書を自由に読めるようにしたいという希望を述べている。この科では、「梵語文典の組織を聞き(教科書につき)其と共に傍課として哲学も研究が出来る」からだとしている。ここを優等で卒業した「スプーナ氏」(D・B・スプーナ) アメリカ人の梵語学者。一九〇一年まで高輪仏

教学院で二年間教鞭をとった。このときには梵語大学の学生。)に薦められたともしている。ここで取り上げる教科に「吠陀の文典をふくみ居らざるにや聞けど、其研究の精粹」であることを挙げて、本科への入学を志すことを述べている。その意志は固く、ここを卒業するまでは、「決して帰朝致さぬなり」とし、四、五年はインドに在ることを述べ、もしその間に死ぬことになれば、「喜んで印度の土とならんとす」としている。

彼らの梵語研究の情熱には並々ならぬものがあり、そういった仏教研究への尽きざる熱意を大等も共有していたと考えられる。

前掲の大等の伝記『島地大等上行実』に掲げられたブルーノ・ベツォールドの追悼文「余の知れる島地師」(注11)では、第一次世界大戦の頃に伝教大師について研究中であった氏がその著書「頭戒論」の読解を「輔導し得る唯一の人」として島地を訪ねたことが、その交際の始まりであったことを述べ、島地の仏教研究の姿勢について次のように述べている。

氏の絶えざる探求的精神に真実の住み家を与へた仏教の哲學的組織は天台哲學であつた。即ち空、假、中の三諦円融の原理は常に氏の思想に顕現した。併し眞実な天台學者である氏はこの思想的形式をさへ決して究極のものとして考へられなかつた。氏は常に高調された。「眞実在の最高なる形式を越えて尚高き形式が可能である」と。故に氏は左のモットーを持ったオイフオリオンにも比して考へらるべきである。

「いよいよ高く私は登らねばならぬ、いよいよ遠く私は見渡さねばならぬ。」(傍線引用者)

このように、島地が仏教學者として天台哲學に対して「一定不変の忠実さ」を持つていたことが語られている。また一方、宗教的には「阿弥陀仏に対する誠実な信者」、「眞宗の眞摯な僧侶であつた」ともしており、島地が眞宗僧侶である一方、『漢和对照妙法蓮華經』を著したことと一端を語つていふと思われる。

こういつた島地の仏教への姿勢については、前掲の田村公子著「島地大等が宮沢賢治に与えた影響」(注12)においても、大等が論文「法華大意」(一九一四)において法華經理解における日蓮の業績を高く評価していることを指摘するとともに、梅原猛が、島地大等の「隠された信仰」として「法華經信仰」、「日蓮信仰」を指摘していることを挙げている。

さらに、氏の仏教學者としての研究方法、立場について、島地の伝記『島地大等 and 上行実』の復刻版の解説者、山内舜雄は、木村泰賢の文章『現代仏教』四十一号から「大学に於て師の専ら担任された所は日本仏教の歴史的研究を主とし、かねて天台・華

嚴・密教等に渉る漢文古典の評釈であつた。」という一節を挙げて、島地の學者としての位置を示している。また、その後で、山内は、「今日から見ると、当時の日本學界とは無縁の、自由な一外国人ブルノー・ベツォールド氏の島地評こそ、師の人間像の正鵠を得ているのではないかと思われる」と、ベツォールドの文章を評価している。ベツォールドは、自身の聞き書きから次のように述べている(注13)。

氏の死の一年程前に氏は私にかうした事を打ち明けられた。それは氏の不治の病ひと他の理由とのために、氏は帝國大學に於て教授となる見込みがない。従つて氏はさういふ地位の上から大きい勢力を得、之を用ひて以て仏教學者を養成し出すといふやうな機縁が得られない。氏は云はれた、「だから私はそれとは別の道、即ち古典學者の伝承的経路を辿つて、少數の選ばれた弟子に対して身を献げ、私の提供し得る最上のものを伝へる様に決心したのです。」と。(傍線引用者)

ここには、若き頃、玄奘、法頭の跡を辿つて仏蹟を踏査したところから一貫して変わらぬ仏教研究についての、原点回帰的な姿勢があると言えるのではなからうか。

7、仏蹟探検成果の公表 写真・将来品・図録について

インドから帰国した後の島地はどのようにして、盛岡の願教寺に就任したのだろうか。

前掲の片山章雄の論文においては、大谷探検隊の探検成果の公表について、資料に記載された事実を追いながらの詳細な記述が

ある。一九〇三(明治三十六)年三月から九月の間に、第一次大谷探検隊のインド隊員、東南アジア・中国踏査者のうち、直接帰った者はすべて帰国したという(これとは別行程を辿った新疆隊は天山南路の庫車方面を探索した渡辺哲信・堀賢雄の二名。渡辺は一九〇四年五月の帰国)。その間一九〇三年三月二十五日に、光瑞が探索の成果公表についての直諭を出すとともに、四月には大著述の公刊を予告、五月五日の法要中に数百名の関係者に発掘物、将来品や写真・拓本類の陳列公表をしているという。それに続いて随行者の手記等の発表が次々行われた、大等も「錫崙に在りし六日間の日記(『六條字報』二十四号 明治三十六年九月十八日)を発表している。

片山が注目されるとして言及しているものに、五月下旬から大谷家別邸があつた須磨の月見山のテントで開始された「仏蹟巡拝記編纂」があり、その編纂係として挙げられた二〇名の随行者の内に大等も名前を連ねている。さらに、黙雷が八月十九日にテントの編纂部を訪問、前述したように、このとき帰国した大等と会い、翌二十日に藤井宣正の遺骨を迎え、二十一日に実子黙爾の訃報を東京からの電報で知ったという。八月十七日には、大等は京都滞在中に「錫蘭日記」を抄録して同窓会誌に投稿(前掲)。彼岸の後には編纂部テントを除いて生活用等のテントが引き払われる予定だったという。

片山は、さらに、翌一九〇四年一月、本願寺室内部(本多惠隆代表)の名で刊行された『印度撮影帖』について、その編纂には「大等の尽力が大きく、大等とともに一本を賜った黙雷は、前年

十二月に大等が光瑞の命を受け編集に従事したことを記した(一九〇七年九月十七日『紫風全集』四八〇頁)と指摘している。このように、インド隊の成果は、大等の編集によって『印度撮影帖』にまとめられたことがわかる。『印度撮影帖』は、現在国会図書館のデジタル資料として見ることができる。それには、「明治二十七年一月 光瑞」の巻頭言、「解説関係地図」、「目次」と続き、探索地が第一から第四十八まで挙げられ、写真付きで解説されている。そこには、前述の黙爾の手記に登場した、インドとアフガニスタン国境の附近や、パツール氷河、カシミール国のスリナガル、「藍毘尼園阿育王ノ石柱」、ベナレスの「鹿野苑ノ古塔」、仏陀伽耶の大塔、そこに生える菩提樹の他、「鷲峯聖蹟」の「説法華経塔址」などが含まれている。それらは、峨々たる山並み、古い仏塔などの画像であり、厳しい探検の実態をうかがわせるに足るものである。この凶録は大等・黙雷が一本を賜ったとあり、願教寺にあつたことは確実であろう。しかも、大等が願教寺で夏季仏教講習会を開くことになるのは一九〇八年で、その講習会の中で、釈迦の聖蹟を実見した際の話を交えながらの講話があつたことは推測に難くない。

なお、前掲の島地の伝記によれば、仏蹟探検の成績を整理した後、一九〇四(明治三十七)年・一九〇五年の二年間、島地は比叡山に入り、「学道の辿りに沈潜したまうた」と言う。一九〇六(明治三十九)年一月、三十二歳のとき上京、学僧としての生活を始めると共に、東京の諸大学において続く五年間に亘る仏教学の講義を開始した。その間、一九〇七(明治四十)年四月三日に、島地黙

雷の息女篤子と結婚。同年十月、大阿闍梨位を享けた。その年の夏から、願教寺での夏季仏教講習会が開かれ、その後一九一一年(明治四十四)年、十五歳の賢治もその講話を聴くことになるのである。

8、新疆隊のこと―天山南路の仏教の地、その遺蹟について

第一次大谷探検隊のうち、インド隊と分かれてタクラマカン砂漠を縦断して中国踏査に向かったのが新疆隊である。この探検の実態について詳細な報告をしたのは、白須浄眞著『忘れられた明治の探険家 渡辺哲信』(注14)、および『大谷探検隊とその時代』(前掲書、注9参照)である。これによれば、ヨーロッパから陸路を進んだ光瑞一行のうち、渡辺哲信、堀賢雄は、タシユクルガンで一行と別れた後、ホータンで計画を練り、ヘーデンが遭難して生死の境をさまよったタクラマカン砂漠のバクセムを越えて、遂に欧州の学者が到達できなかった古代の仏教の地、庫車を目指すこととした。そして、世界で初めて庫車に至り、キジル千仏洞、クムトラ千仏洞等の発掘調査を行った。庫車は、法華経の漢訳者、鳩摩羅什の故郷とされる、三世紀頃の仏教、音楽の都である。その際の将来品として、「菩薩頭部塑像」(クムトラ千仏洞、七、八世紀 東京国立博物館所蔵、「舍利容器」(スバシ出土、六、七世紀 東京国立博物館所蔵)がある。

前者の菩薩頭部について、白須は前掲書『大谷探検隊とその時代』で言及している(注15)。この菩薩頭部を木下李太郎がスケッチし、それを斎藤茂吉が歌集『赤光』(一九一二年)の扉に掲載しているという。この李太郎のスケッチは、一九一〇(明治

四十三年)に『三田文学』に掲載したもので、李太郎は、その年の春に京都帝室博物館に展示されたものを見たとのことで、大谷光瑞寄贈の「支那トルキスタン庫車内トングスバス発掘」のものという解説を付しているという。大谷探検隊の将来品が、当時の芸術家に与えた影響が垣間見られる指摘である。賢治にも、菩薩頭部のスケッチがある。

また、賢治の作品との関連性を言えば、「雁の童子」との関連が考えられる、第三次隊の橋瑞超が将来した「有翼天使像」(ミールン出土 三世紀 東京国立博物館所蔵)もある。

これらの将来品は、池澤夏樹が指摘しているように、『西域考古図譜』(香川黙識編 国華社 一九一五年)にまとめられている。これは、現在国立情報学研究所の「デジタル・シルクロード・プロジェクト 『東洋文庫所蔵』貴重書アーカイブ」として見ることが出来る。この中に、ミールン発掘の「有翼天使像」の写真も見る事が出来る。賢治の西域幻想には童子のイメージが度々現れるところに特徴があるが、これら画像と賢治の作品との関係については、今後の研究に譲る。

9、賢治の「心象スケッチ」の新たな方法

賢治の「心象スケッチ」は、短歌などに見られるように、自ら実際に見た情景のスケッチから形成されるものから始まったと思われるが、西域作品を見ると、これが他者の見た心象、あるいは何らかの図録を見たことから形成されるものがあつたことを知ることが出来る。そこには、賢治の「心象スケッチ」の形成過程

や方法が垣間見られ、興味深い。

(秋枝美保担当)

第二部「マグノリアの木」作品論

はじめに

「マグノリアの木」は、短歌「640 けはしくも／刻むころのみ
ねみねにかをりわたせる ほうの花かも」「641 ここはこれ／惑ふ
木立のなかならず／しのびをならふ／春の道場」(「歌稿B」)「大
正六年七月より」、及び、大正七年六月発行と推定されている「ア
ザリア」(「六号(終刊号)」に発表された断章「峯や谷は」から三回の推
敲を経た後の最終形態であり、賢治の当時の宗教観を描いた作品
でもある。一般的に大正十三年頃に執筆したものと推測されてい
る(注1)。本作品は、筆者の学部卒業論文で取り上げた「雁の童
子」と同じように「西域異聞三部作」に属するが、後者に比べる
と、「マグノリアの木」は童話として、かなりストーリー性が薄れる。
しかも西域要素が少ないゆえに、賢治の中の西域像のあり方を究
明するどころか、「マグノリアの木」の作品からその創作意図を掘
り下げることさえ難解な作業であろう。ここでは、先駆形である
「峯や谷は」のテクストと対照したうえで、マグノリアのイメー
ジや作品の成立背景を探るということを主たる方法として作品を
解釈していくことにした。

1、マグノリアの花のイメージ

「峯や谷は」は、獣が通るといふ想像も伴う山道において、主

人公の「私」という人物がわらじの底を抜いてしまったほどの陰
しい峯や谷を歩きながら、雨の降った日に茨や灌木の中でほのお
花が一斉に咲いた、という素朴な話である。それを下敷にして、
天童子の登場の場面やもうひとりの「自分」との「覚者の善」に
まつわる論議をするという二つのシーンを加えて、「マグノリアの
木」テクストが展開されていく。

ここで特筆すべきは、賢治の白い花・マグノリア(あるいはほお
の花)へのこだわりである。

賢治は「マグノリアの木」の中で、マグノリアの花を真っ白い
鳩(ほと)に喩えている。

「サント、マグノリア、

枝にいつぱいひかるはなんぞ。」

向ふ側の子が答えました。

「天に飛びたつ銀の鳩。」

こちらの子がまたうたひました。

「セント マグノリア、

枝にいつぱいひかるはなんぞ。」

「天からおりた天の鳩。」

モクレン属の中で花が一見して鳩に見えるのは、その花の色、大
きさ、姿からしてコブシであろう。つぼみの形が握り拳に似てい
ることからコブシという名前が由来し、その花弁は白色で六個、
三個の萼には銀色の軟毛が密生している。毎年三月中旬に他の
花に先駆けてコブシの花は咲き始め、まるで爛漫の春の到来を告
げるように咲き誇る。それは、春を待ちわびる人々への天からの

贈物である。優雅な芳香を放ちながら、上向きに空へ向かって開き、ユブシのつぼみは、南側からふくらみ始めるのでつぼみの先端はほとんどが北の方向を向く。北の方向には賢治の故郷をモチーフとした理想郷のイーハトーブがあり、のちに亡くなった妹の安寧を確かめ、同時に自らの信仰の行方を追う時空がある(注2)。

マグノリアという言葉自体は学術的にはモクレン属の木の総称を指す言葉であつて、種類を示すものではない。賢治はおそらくユブシの木を指してマグノリアというエキゾチックな名前に置き換えたのではないかと思われる。

また、「マグノリア」の仏教世界における象徴的な意味について、周異夫氏は次のように述べている(注3)。

〈マグノリア〉に対して、「マグノリアの木」の中の天の子供が〈サンタ、マグノリア〉〈セント、マグノリア〉と歌う。サンスクリットにおいて、〈寂静〉が「santa」と読むので、〈寂静〉の意味がかけられているとの考え方も成立するであろうが、〈マグノリアの木は寂静です〉の表現を考えると、一理があるように思われようが、推測に過ぎないであろう。〈中略〉それは聖なる花であり、〈寂静印〉である。寂静印は仏教の言う三法印の一つであり、生死を含むすべての煩惱から解脱された絶対安住の境地を指すものである。〈マグノリア〉はこのような仏教の言う絶対基準の一つであり、一切の生物を安楽浄土へ導く真理である。

周は、さらに「サンタ」＝「santa」という言葉の出典はキリスト教の「聖なる」という意味にあるとし、作品にエキゾチックな

雰囲気を与付したと述べている。「サンタ」についてどう捉えるべきかこれまで疑問に思っていたが、周氏の論によって、それについての認識がより明白になった。そこには、仏教とキリスト教が融合したガンダーラ文化のイメージが見られ、興味深い。

2、「マグノリアの木」の執筆背景

先駆形である「峯や谷は」の分析は「マグノリアの木」を解釈する上で、重要な手掛かりである。ここで、「峯や谷は」の創作時期である大正七年(一九一八年)、賢治二十二歳の出来事を検討してみよう。

- 一月 「卒業と将来の問題につき、父と談合する。」
- 二月 「アザリア」(五号)に断章「復活の前」を発表。卒業得業論文「腐植質中ノ無機成分ノ植物ニ対スル価値」提出
- 三月 盛岡高等農林学校卒業。親友保阪嘉内、「学籍から除名される。」
- 四月 研究生として入学(のち盛岡高等農林学校実験指導補助を嘱託される)。稗貫郡土性調査が始まる。徴兵検査、「第一種乙種」。
- 六月末 「岩手病院で診察を受ける。」「肋膜炎」と診断される(書簡77)。「父が心配して帰花させたと判断する。」(保阪嘉内宛て、河本義行書簡から)「アザリア」(六号)(終刊号)に短編「峯や谷は」を発表
- 八月 童話の制作を始める。童話「蜘蛛となめくじと狸」、「双

子の星」を家族に読んで聞かせる(宮澤清六「兄賢治の生涯」から)。

十二月 トシ入院の報せがあり母と上京。翌年二月まで滞在。

年表(注4)に示した通り、賢治は父・政次郎と卒業後の進路について対立し、実家の古着商を継ぐことに反抗していた。「峯や谷は」の最後を「われは誓ひてむかしの魔王波旬の眷属とならず、又その子商主の召使たる辞令を受けず」と書いて、しめくくっている。魔王波旬とは、釈迦の成道を妨げようとした魔神のことである。「春の道場」を理想の修行場とする賢治にとつては、実家の古着商を継ぐことで、自分も魔王波旬になるかもしれないの思いがあり、父・政次郎の「その子商主の召使たる辞令を受けず」に、自分の宗教信仰を最後まで貫いていく決意を示したともとれる。また、同工異曲の効果を成す一句が「マグノリアの木」にも現れている。「覚者の善は絶対です。それはマグノリアの木にもあらはれ、けはしい峯のつめたい巖にもあらはれ、谷の暗い密林もこの河がずうつと流れて行って氾濫をするあたりの度々の革命や饑饉や疫病やみんな覚者の善です。けれどもこた々ではマグノリアの木が覚者の善で又私どもの善です」というくぐりである。世界の隅々までに、仏教の代表的な主張「覚者の善」が必ず浸透していくので、「革命」・「饑饉」・「疫病」があるとしても、結果的には「絶対的な善」の世界になる、としている。

また「マグノリアの木」の創作源について、具体的な地名は登場していないが、従来の研究においては、創作過程の最初の発想

は賢治の早池峰山・円森山の登山体験にあつたと推測している(注5)。主人公「諒安」はもちろん実在の人物ではなく、大谷探検隊のメンバー達(島地大等、清水黙爾など)がその原型になったのではないかと考える。島地大等は、第一部で詳述したとおり、盛岡高等農林時代に賢治が実際に会っており、彼が読んで法華経信者となるきっかけとなった『漢和对照妙法蓮華経』の著者である。また、清水は、島地大等の友人で、かつ義弟であり、サンスクリット語の学習やインド探検のために、明治三十五年十二月から翌年八月までインドで梵学経典の研鑽・翻訳や仏教遺跡の考察に努めてきた人物である。旅の心労や病気に襲われ、二十八歳の若さで他界した。彼の死後、親族や友人、特に島地の協力で、その翻訳作品や書簡がまとめられ、明治四十年一月一日に『紫風全集』という追悼文集が出版されたことは、第一部での記述の通りである。

清水黙爾は、インドバアーライチ村で書いた藤井瑞枝(藤井宣正の妻)宛ての書簡(一九〇三年前半)に、探検するうちに実際に遭った「しのびをならふ」ような危険で困難な情景を歌の形で詳細に書き残している(『紫風全集』p.342)。それは、

象の聲窓の「ガラス」にひびきけり。

黒光りする人月に嘯けり。

白人の馬車馬太く土人瘦す。

腰折れ
猿のむれ 山羊のむれまた 栗鼠の群 虚空
はるかに鷲の一むれ。

虎哮けり 象嘯けり 獅子吼けり庭のかたへ
にコブラ (毒蛇) ぬたくる

といったくでありである。「峯や谷は」にも、「私」の登山中、大変
険しいところで獣が歩いたことを想像する場面がある。

峯や谷は無茶苦茶に刻まれ私はわらじの底を抜いてしまつて
その一番高いところから又低いところ又高いところと這ひ歩
いてゐました。

雪がのこつて居てある処ではマミと云ふ小さな獣の群が歩い
て堅くなつた道がありました。

また、前述のように、これを元に書かれた「マグノリアの木」
においても、同様の険しい山道についての描写がある。これらを
対比して読んでいくと、大等たちの体験した仏蹟探検の険しさと、
作品「マグノリアの木」における諒安の山中を歩き回る体験は、
きわめて類似しているように思えてならない。賢治が『紫風全集』
に書かれたようなことを、島地から聞いていたことを推測するこ
とはあながちまちがいではないと考えられる。作品「マグノ
リアの木」の前半は、「私」が険しい山中で美しい白い花を見たこ
とに中心があるが、それは、大等の体験談にあるように、困難な
仏蹟探検のさなかに「仏」を自らの中に得た体験を、山中で白い
花に遭遇した自らの体験に重ねたと見ることができよう。

さらに、「マグノリアの木」後半には前述のように「羅をつけ
瓔珞をかざり日光に光」る子供が登場している。この二人の子供
を「たゞの子供ではない」と諒安は認識している。この子供の
イメージと、「銀の鳩」、マグノリアの花とは、一つにつながり、
天から降り立った天童子のイメージとして重ねられる。「マグノ
リアの木」の草稿には、鉛筆で「ガンダラの子ら」という記入が
あり、賢治は、作中の子供の姿がガンダラ系統に属することを示
そうとしていると考えられる。金子民雄は、この書き込みがあつ
たために、この作品を西域童話の一つに考えているようである
(注6)。また他の西域童話「みあげた」、「インドラの網」、「雁
の童子」、詩「小岩井農場」などにも、同じ性格を有する天童子
が出ている。これらの天の子供について、いずれも金子は西域か
らの発掘の事実がもとになつて指摘している。ただ金
子はスタインの『カセイ砂漠の廢墟』(Ruins of Desert Cathay
一九二二)を賢治の発想の原点として、指摘している(注7)。しか
しながら、これらの発掘については、大谷探検隊も、第一次から
第三次の探検で同じ場所に行つており、将来品の中にも天使の画
像を含むものがある。その一部の将来品は現在東京国立博物館に
収められている。

また、「マグノリアの木」テキストには、諒安の他に、「子供ら
と同じなりをした丁度諒安と同じくらゐの人」が登場し、その人
物との間に以下のような対話があつた。

「あなたですか、さつきから霧の中やらでお歌ひになつた方
は。」

「え、私です。又あなたです。なぜなら私といふものも又あなたが感じてゐるのですから。」

「さうです、ありがたう、私です、又あなたです。なぜなら私といふものも又あなたの中にあるのですから。」

その人は笑ひました。諒安と二人ははじめて軽く礼をしました。

自ら仏教の伝来の聖地・西域の地に足を運び、そこで經典の研究や遺跡の踏査をすることは、賢治にとって、生涯大きな夢だったとも考えられる。しかし、家庭の事情や自身の体の弱さなど現実的な理由で、この夢をあきらめざるを得なかった。「え、私です。又あなたです。なぜなら私といふものも又あなたが感じてゐるのですから。」というところは、賢治が大等ら釈迦聖地探検をした僧侶たちの見たことを自分の中の風景として同時に感じていることを示しているように思われる。他人の見た景色、他人の経験したことを賢治独自の脚色によつて自らの「心象」として形成し、「マグノリアの木」という「心象スケッチ」が生み出されていったと考えたい。

また、諒安のモデルとして島地大等や清水黙爾らを考えることについて、より有力な資料や証拠で検証することが今後の課題として残っている。また、当時の大谷探検隊の活動動静・様子や探検隊の将来品について、『紫風全集』（鶏声堂）以外にも、『教海一瀾』（教海雜誌社）や『六條學報』（第一書房）、『高輪學報』（高輪學報学友会）といった仏教関係の機関誌や将来品の図録に有力な情報がある。これらの資料は今後『西域童話』研

究における重要な手掛かりになると考えられる。

3、今後の課題

西域童話の作品原稿には「普賢／菩薩／所説の／宙宇の／夜」（「インドラの網」異文メモ）や、「ガンダラの子ら」・「竜樹菩薩の大論以前」（「マグノリアの木」異文メモ）といった仏教関係の専門的知識が述べられている。「西域童話」においては、その題材のモデルはスタインや大谷探検隊がシルクロードのミールンで砂の中から発掘した壁画の有翼天使像であり、「インドラの網」における千闍大寺の壁画でもある。これらの画像的なものにとどまるイメージを島地大等らとの交流を通して、より明確かつ鮮烈に作品に再現することができたと考えたい。このようなガンダラ系統の仏教・仏教芸術への関心のたかまりが、童話の裏にはあると思われる。これを考察するためには、美術史や、宗教史や、文化社会学など、多面的なアプローチが必要となる。「西域童話」であるにもかかわらず、関連作品のすべてを仏教的観点だけから解釈することは極めて一面的で危険な見方ではなからうか。しかし、だからといって、仏教的観点を「西域童話」から切り離すのも妥当性に欠ける。

賢治の作品創作は、法華經の真意を掘り出すところから出発したものであると考える。そこで「インドラの網」や「四又の百八口」といった同系列の童話との比較、及び西域要素が多く登場する『春と修羅』の第二集との関連性の考察を手掛かりに、賢治の宗教観の原点や源流にたどり着くことで、西域童話の本質やそこに包摂

されている独特な人間観を探り当て、新しい宮沢賢治像を提出するとともに、賢治が「西域童話」作品群を作り出した意図がどこにあったのかを浮かび上げらせ、賢治のなかの「西域像」とはいかなるものであったのかを解き明かすことを今後の研究の目的とする。
(鄭亜楠担当)

注

第一部

注1 金子民雄『宮沢賢治と西域幻想』(白水社 一九八八年二月)

注2 天沢退二郎・金子務・鈴木貞美編『宮沢賢治イーハトーヴ

学事典』(弘文堂 二〇一〇年十二月)

注3 田村公子「宮沢賢治研究のための覚え書き：島地大等の『漢

和对照妙法蓮華経』(『琉球大学留学生センター紀要 第一

号』二〇〇三年十二月)

注4 田村公子「島地大等が宮沢賢治に与えた影響」(『琉球大学

留学生センター紀要 留学生教育 第二号』二〇〇五年三

月)

注5 白井成允『島地大等和上行実』(初版 一九三三年七月 明

治書院 復刻版『伝記叢書二一九 青空社 一九九三年九

月)

注6 白須浄眞『大谷探検隊とその時代』(二〇〇二年十月 勉誠

出版) p11～p13

注7 金子民雄「光瑞とヘデインの交流」(『大谷光瑞とスヴェン・

ヘデイン 内陸アジア探検と国際政治社会』二〇一四年九

月 勉誠出版) p10

注8 片山章雄「大谷探検隊の活動と大谷尊重(光明)・渡辺哲信」

(『東海大学文学部紀要』七十七号 二〇〇二年)

注9 白須浄眞『大谷探検隊とその時代』(前掲書注6 p17～19)

に伊藤整「日本文壇史」における記載を引用して解説してい

る。

注10 注5参照。『三 印度仏蹟の探査』p12～16

注11 注5参照。ブルーノ・ベッオルド記「余の知れる島地師」

p121～129

注12 注4参照。p34～35

注13 注5参照。巻末解説。

注14 白須浄眞著『忘れられた明治の探検家 渡辺哲信』(一九

九二年十二月 中央公論社)

注15 注6参照。「茂吉と李太郎の西域」「和辻哲郎の西域」p

18～21

第二部

注1 周異夫「『マグノリアの木』の『マグノリア』の意味に関

する一考察」『日本文芸研究』六十一巻3・4号 二〇一

〇年二月十日 p65

注2 大塚常樹『宮沢賢治 心象の記号論』朝文社 一九九

九年九月二十五日 p281

注3 注1参照 p15

注4 宮沢清六 他(編者)『新校本宮沢賢治全集第十六巻(下)

年譜篇』 筑摩書房 二〇〇二年二月十日 p.40～176に
よる。

注5 金子民雄 『宮沢賢治・童話と詩の舞台』 れんが書房新

社 一九七九年十月三十一日 p.11～15

注6 注5参照 p.10

注7 金子民雄『宮沢賢治と西域幻想』(白水社 一九八八年一月

p.38～40)

なお、宮沢賢治作品の引用は、『新校本宮沢賢治全集』一卷、九
巻、十一巻(筑摩書房)によった。

付録資料(秋枝担当)

島地大等・島地(清水) 黙爾 年譜
出会い

神田錦城中学(一八八〇年、福澤諭吉の高弟である矢野文雄
(号・龍溪)が、慶應義塾旧医学校跡に創設した、三田予備校を
源流とする慶應義塾の関連校である。一八八一年に三田英学校と
改称し、英語教育を中心とした教育を始める。創立以来男子校で
あったが、二〇〇四年に施設や設備を改修し、二〇〇六年以降男
女共学校となった。)

一八八五年(明治二十三)

清水 五年

大等 三年

一八九四年(明治二十七)

黙爾 京都本願寺文学寮に入学。入学時に、島地家から清水
家(岩国市の寺)の養子となった。梵学を志した。

一八九五年(明治二十八)

大等 同校入学。

一八九七年(明治三十)

三月 両人文学寮卒業。

大等 本願寺大学林に進学。

黙爾 高楠博士門下で梵語を専攻。

大等 梵語を、川上貞信氏の指導で学ぶ。梵文の研究。

一八九九年(明治三十二) 七月

大等 先考圓寂の際、吊状を得た。

一八九一年(明治二十四)

三月 大学林卒業。

四月 高輪仏教学院に就職。

五月六日 大等 島地家の人となる。

一九〇一年～一九〇四年までは、黙爾・大等は、島地家という家
庭内で、一分一秒でも一緒にいたことがない。

一九〇二年(明治三十五)

二月 黙爾に名ばかりの印度留学の辞令が出た。

三月十五日 神戸、京都、奈良見物をした後、横浜から出港。

三月十九日 神戸出港。

十月 大等 宗主の印度聖蹟探検に加わることになる。

高輪仏教学院を辞して、印度へ渡航。孟買ムンバ

十二月

いじに上陸してからは、互いに連絡をとりあう。
大等が仏陀伽耶の調査に従事している時、黙爾が
仏陀伽耶のダックバンガローにやってきて、再会。
しかし、黙爾は、台命により、数時間で北方ゴンダ
地方へ赴いた。

一九〇三年明治三十六

一月 王舎城の探検が済み、大等は単身ベツチアに進むことになつた。途中、パンキプールからのりかえてベナレスに行き、一日半逗留して梵語大学の数学教師に会い、パンキプールへ引き返した。

清水黙爾が、探検終了後には、ベナレスの梵語大学に移る方針であると聞いていたこと、鹿野苑の聖蹟に詣りたいという希望もあつたため、ベナレスに寄つた。

★このとき

清水・井上弘円は、舎衛と迦毘羅衛との古址を踏査する任務にあつた。

島地は、単身拘尸那揭羅(クシナガラ)の古址発見という任務に服していた。

↓この両方面の探検は、何れもヒマラヤ山南に拡がっている漠々無尽のタライニ波羅の深林中を踏査すべき任務であつた。そこには、気候、猛獣、毒蛇その他、くさぐさの故障があつた。

尼波羅の国王からパスポートを得ねばならなかつたが、それは地理上島地の責任となつた。

★約一ヶ月を経て、島地は任務を終えて清水らと合流のためゴラクプールに行き、清水らの駅舎に行つて帰りを待った。

三月四日 午後四時半、清水・井上・本多惠隆が一緒に帰つてきた。

三月五日 午後、島地・本多は甲谷他カルカッタの方へ向かう。清水・井上は舎衛国の古址探検に立出。清水らの発車時間が一日早かつたので、島地らはゴラクプール駅で彼らを見送つた。印度での再会はもはや無かつたので、清水は涙を見せた。これが今生の別れとなつた。

七月三十日 大等帰国。

八月二十日 夜、島地は帰朝後初めて、父と京都で会つた。

八月二十一日 午後一時、清水の長逝の凶事を知つた。

一九〇四年(明治三十七) 比叡山で、学道に専念する。

一九〇五年(明治三十八) 同右

一九〇六年(明治三十九) 三十二歳

一月、上京。学僧としての生活を始めるとともに、東京の諸大学において仏教学の講義を始める。

一九〇七年(明治四十)

四月三十日 島地黙雷の息女、篤子と結婚。

十月 大阿闍梨位を享けた。

一九〇八年(明治四十一年)から、岩手県願教寺で仏教講習会を開く。

From the viewpoint of the setting of the Western Regions in Kenji Miyazawa's novel "Magnolia Tree" - influence from Daitou Shimaji's personal experience discourse of his expedition to Indian Buddhist ruins

Miho Akieda(Aoki)、Anan Tei

. In focusing on Kenji Miyazawa's Western Regions as the setting in his novel we will look at the activities of the Otani Expedition which brought back many relics from the Buddhist ruins of the Western Region towards the end of the Meiji Period. In particular, we will discuss the connection between his work, Magnolia Tree, and Daitou Shimaji, a priest at Gankyōji in Morioka City, who was an active member of the first Otani Expedition. It is with this point that I shall indicate that Miyazawa's imagery sketches are taken from the experiences of another, those of Daitou Shimaji.

【Keyword: Kenji Miyazawa, Western Regions, Otani Expedition】